

* 2024年9月改訂（第2版）
2023年11月改訂（第1版）

日本標準商品分類番号
87449

貯法：室温保存
有効期間：3年

持続性選択H₁受容体拮抗・アレルギー性疾患治療剤
ロラタジン口腔内崩壊錠

承認番号 販売開始
22300AMX00995000 2011年11月

ロラタジンOD錠10mg「JG」

Loratadine OD Tablets

2. 禁忌（次の患者には投与しないこと）

2.1 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

3. 組成・性状

3.1 組成

販売名	有効成分 (1錠中)	添加剤
ロラタジン OD錠 10mg 「JG」	ロラタジン 10mg	D-マンニトール、結晶セルロース、ヒドロキシプロピルセルロース、アスパルテーム（L-フェニルアラニン化合物）、クロスボビドン、ステアリン酸マグネシウム

3.2 製剤の性状

販売名	色・剤形	外形・大きさ・重量			識別コード
		表面	裏面	側面	
ロラタジン OD錠 10mg 「JG」	白色の素錠				JG 24
		直径 7.0mm	厚さ 3.5mm	重量 140mg	

4. 効能又は効果

- アレルギー性鼻炎
- 蕁麻疹
- 皮膚疾患（湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症）に伴うそう痒

6. 用法及び用量

成人：通常、ロラタジンとして1回10mgを1日1回、食後に経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。

小児：通常、7歳以上の小児にはロラタジンとして1回10mgを1日1回、食後に経口投与する。

8. 重要な基本的注意

〈効能共通〉

8.1 効果が認められない場合には、漫然と長期にわたり投与しないように注意すること。

〈アレルギー性鼻炎〉

8.2 季節性の患者に投与する場合は、好発季節を考慮して、その直前から投与を開始し、好発季節終了時まで続けることが望ましい。

9. 特定の背景を有する患者に関する注意

9.1 合併症・既往歴等のある患者

9.1.1 てんかんの既往のある患者

十分な問診を行うこと。発作があらわれたとの報告がある。[11.1.2 参照]

9.2 腎機能障害患者

ロラタジン及び活性代謝物 descarboethoxyloratadine (DCL) の血漿中濃度が上昇するおそれがある。[16.6.1 参照]

9.3 肝機能障害患者

ロラタジンの血漿中濃度が上昇するおそれがある。[16.6.2 参照]

9.5 妊婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には、投与しないことが望ましい。動物試験（ラット、ウサギ）で催奇形性は認められていないが、ラットで胎児への移行が報告されている。

9.6 授乳婦

治療上の有益性及び母乳栄養の有益性を考慮し、授乳の継続又は中止を検討すること。ヒト母乳中への移行が報告されている。[16.5 参照]

9.7 小児等

9.7.1 3歳以上7歳未満の小児に対しては、ロラタジンドロップ1%を投与すること。

9.7.2 低出生体重児、新生児、乳児又は3歳未満の幼児を対象とした臨床試験は実施していない。

9.8 高齢者

高い血中濃度が持続するおそれがある。一般に生理機能（肝、腎等）が低下している。[16.6.4 参照]

10. 相互作用

ロラタジンからDCLへの代謝にはCYP3A4及びCYP2D6の関与が確認されている。[16.4 参照]

10.2 併用注意（併用に注意すること）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
エリスロマイシン、シメチジン [16.7 参照]	ロラタジン及びDCLの血漿中濃度の上昇が認められるので、患者の状態を十分に観察するなど注意すること。	薬物代謝酵素（CYP3A4、CYP2D6）阻害作用を有する医薬品との併用により、ロラタジンからDCLへの代謝が阻害され、ロラタジンの血漿中濃度が上昇する。[DCLの血漿中濃度が上昇する機序は不明]

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

11.1 重大な副作用

11.1.1 ショック、アナフィラキシー（いずれも頻度不明）

チアノーゼ、呼吸困難、血圧低下、血管浮腫等があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

11.1.2 てんかん（頻度不明）

[9.1.1 参照]

11.1.3 痙攣（頻度不明）

11.1.4 肝機能障害、黄疸（いずれも頻度不明）

AST、ALT、 γ -GTP、Al-P、LDH、ビリルビン等の著しい上昇を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがある。

11.2 その他の副作用

	1%以上	0.1~1%未満	0.1%未満	頻度不明
精神神経系	眠気、倦怠感	めまい、頭痛		
呼吸器		鼻の乾燥感、咽頭痛		
消化器		腹痛、口渇、嘔気・嘔吐、下痢、便秘、口内炎	口唇乾燥	胃炎
過敏症		発疹	じん麻疹	発赤、紅斑、そう痒
皮膚				脱毛
肝臓		ALT 上昇、AST 上昇、ビリルビン値上昇、 γ -GTP 上昇、Al-P 上昇		

	1%以上	0.1~1%未満	0.1%未満	頻度不明
腎臓		BUN 上昇、タンパク尿		尿閉
循環器		動悸	頻脈	
血液		好酸球増多、白血球減少、好中球減少、単球増多、リンパ球減少、白血球増多、リンパ球増多、ヘマトクリット減少、ヘモグロビン減少、好塩基球増多、血小板減少、好中球増多		
その他		尿糖、眼球乾燥、耳鳴、ほてり	味覚障害、月経不順、胸部不快感	不正子宮出血、胸痛、難聴、浮腫（顔面・四肢）

12. 臨床検査結果に及ぼす影響

アレルギー皮内反応を抑制するため、アレルギー皮内反応検査を実施する3~5日前より本剤の投与を中止すること。

13. 過量投与

13.1 症状

海外において、過量投与（40mg から 180mg）により眠気、頻脈、頭痛が報告されている。

13.2 処置

本剤は血液透析によって除去できない。[16.6.1 参照]

14. 適用上の注意

14.1 薬剤交付時の注意

14.1.1 PTP 包装の薬剤は PTP シートから取り出して服用するよう指導すること。PTP シートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔をおこして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することがある。

14.1.2 本剤は吸湿性を有するため、使用直前に PTP シートから取り出すこと。

14.1.3 本剤は舌の上のせて唾液を浸潤させると崩壊するため、水なしで服用可能である。また、水で服用することもできる。

16. 薬物動態

16.1 血中濃度

16.1.1 単回投与（線形性）

健康成人男性（6~12 例）にロラタジン錠 10、20^{注）}、40mg^{注）}を空腹時に単回経口投与したとき、DCL の血漿中濃度について線形性が認められた¹⁾。

16.1.2 反復投与

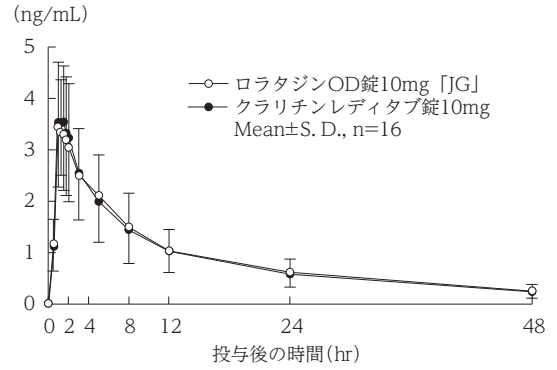
健康成人男性（5 例）にロラタジン錠 10mg を 1 日 1 回 5 日間、空腹時に反復経口投与したとき、血漿中ロラタジン濃度は連投開始後 4 日までに定常状態に到達し、AUC (0-24hr) について算出した累積係数は 1.3 であった。

健康成人男性（6 例）にロラタジン錠 20mg^{注）}を 1 日 1 回 5 日間、空腹時に反復経口投与したとき、血漿中ロラタジン及び DCL 濃度は連投開始後 4 日までに定常状態に到達し、AUC (0-24hr) について算出した累積係数はともに 1.3 であった²⁾。

16.1.3 生物学的同等性試験

(1) 水で服用

ロラタジン OD 錠 10mg [JG] とクラリチンレディタブ錠 10mg を、クロスオーバー法によりそれぞれ 1 錠（ロラタジンとして 10mg）健康成人男性に水 150mL と共に絶食単回経口投与して血漿中活性代謝物（DCL）濃度を測定し、得られた薬物動態パラメータ（AUC、Cmax）について 90% 信頼区間法にて統計解析を行った結果、log (0.80) ~log (1.25) の範囲内であり、両剤の生物学的同等性が確認された³⁾。



薬物動態パラメータ

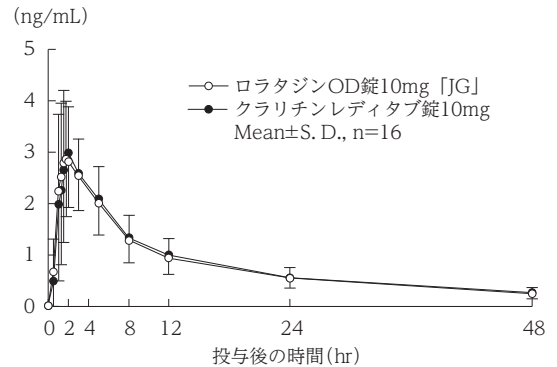
	判定パラメータ		参考パラメータ	
	AUC ₀₋₄₈ (ng・hr/mL)	Cmax (ng/mL)	Tmax (hr)	T _{1/2} (hr)
ロラタジン OD 錠 10mg [JG]	42.7±17.4	3.9±1.2	1.5±1.0	17.2±2.5
クラリチンレディタブ錠 10mg	41.8±16.0	3.9±1.1	1.4±0.4	17.0±2.1

(Mean±S.D., n=16)

血漿中濃度並びに AUC、Cmax 等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

(2) 水なしで服用

ロラタジン OD 錠 10mg [JG] とクラリチンレディタブ錠 10mg を、クロスオーバー法によりそれぞれ 1 錠（ロラタジンとして 10mg）健康成人男性に水なしで絶食単回経口投与して血漿中活性代謝物（DCL）濃度を測定し、得られた薬物動態パラメータ（AUC、Cmax）について 90% 信頼区間法にて統計解析を行った結果、log (0.80) ~log (1.25) の範囲内であり、両剤の生物学的同等性が確認された³⁾。



薬物動態パラメータ

	判定パラメータ		参考パラメータ	
	AUC ₀₋₄₈ (ng・hr/mL)	Cmax (ng/mL)	Tmax (hr)	T _{1/2} (hr)
ロラタジン OD 錠 10mg [JG]	38.4±9.3	3.4±0.9	2.0±1.0	18.7±3.0
クラリチンレディタブ錠 10mg	39.6±11.2	3.5±1.0	2.1±1.3	18.9±2.7

(Mean±S.D., n=16)

血漿中濃度並びに AUC、Cmax 等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

16.2 吸収

16.2.1 食事の影響（錠 10mg）

健康成人男性（12 例）にロラタジン錠 10mg を食後又は空腹時に単回経口投与したときのロラタジン及び DCL の薬物動態パラメータは、以下のとおりであった。DCL の全身曝露に及ぼす食事の影響は認められなかった⁴⁾。

※：成人又は小児を対象とした二重盲検比較試験はすべて食後投与の条件で実施されたため、用法・用量では食後投与を規定した。

		Cmax (ng/mL)	tmax (hr)	AUC (0-∞) (ng・hr/mL)	t _{1/2} (hr)
ロラタジン	食後	7.73±6.81	1.6±0.4	31.2±36.3	14.3±7.8
	空腹時	4.46±4.98	1.2±0.3	15.4±20.5	11.2±8.4
DCL	食後	3.52±0.78	2.3±0.6	41.1±11.8	14.5±3.3
	空腹時	3.34±0.70	1.7±0.3	34.9±6.4	12.5±4.7

(平均±標準偏差、n=12)

16.3 分布

16.3.1 血漿タンパク結合

ヒト血漿に添加したときのタンパク結合率は、ロラタジン 96.8～97.9%、DCL73.3～75.6%であった(測定法:平衡透析法)⁵⁾ (*in vitro*)。

16.3.2 組織中放射能濃度 (ラット)

ラット (n=3) に¹⁴C-ロラタジンを反復経口投与したとき、組織中放射能は大部分の組織で血漿より高く、特に下垂体、甲状腺、副腎、肝臓、涙腺、肺に高濃度の分布が認められた。また、脳内濃度は血漿より低かった。組織中放射能の生物学的半減期は、いずれの組織とも血漿より長かった。甲状腺では 14 日間反復投与でも定常状態に到達せず、蓄積性が示唆された⁶⁾。

16.4 代謝

ロラタジンは、ヒトに経口投与したとき、消化管から速やかに吸収され、初回通過効果によって DCL へと代謝される⁷⁾。ヒトの肝ミクロソームを用いた *in vitro* 試験から、ロラタジンから DCL への代謝には CYP3A4 及び CYP2D6 の関与が確認されている⁸⁾。[10. 参照]

16.5 排泄

健康成人男性 (6 例) に¹⁴C-ロラタジン 40mg^註 (水溶液) を空腹時に単回経口投与したとき、投与 10 日後までに総投与量の約 80% が代謝物として尿及び糞中へ等量ずつ排泄された。尿中にロラタジンは検出されず、DCL は尿中放射能の 2% 未満であった⁷⁾ (外国人データ)。

授乳婦 (6 例) にロラタジンカプセル 40mg^註 (非売品) を空腹時に単回経口投与したとき、少量のロラタジン及び DCL が母乳中に検出された。投与後 48 時間までの移行率は 0.03% であった。AUC_{母乳}/AUC_{血漿} 比は、ロラタジン及び DCL についてそれぞれ 1.2 及び 0.8 であった⁹⁾ (外国人データ)。[9.6 参照]

16.6 特定の背景を有する患者

16.6.1 腎機能障害患者

(1) 薬物動態パラメータ

腎機能障害患者 (12 例: クレアチニンクリアランス ≤ 29mL/min) にロラタジンカプセル 40mg^註 (非売品) を空腹時に単回経口投与したときの血漿中濃度の Cmax 及び AUC は、健康成人男性 (6 例: クレアチニンクリアランス > 80mL/min) との比較において、ロラタジンでは 1.5～1.7 倍、DCL では約 2 倍に上昇した。腎機能障害患者におけるロラタジン及び DCL の t_{1/2} はそれぞれ平均 8 時間及び 20 時間であり、いずれも健康成人と明らかな差は認められなかった¹⁰⁾ (外国人データ)。[9.2 参照]

(2) 血液透析患者

重症の腎機能障害患者 (6 例: クレアチニンクリアランス < 5mL/min) にロラタジンカプセル 40mg^註 (非売品) を空腹時に単回経口投与後 4～8 時間 (計 4 時間) に血液透析を行ったとき、血液透析を行わない場合と比較して、血漿中ロラタジン及び DCL 濃度に変動は認められず、ロラタジン及び DCL ともに透析液中へはほとんど排出されなかった¹⁰⁾ (外国人データ)。[13.2 参照]

16.6.2 肝機能障害患者

肝機能障害患者 (7 例) にロラタジンカプセル 40mg^註 (非売品) を空腹時に単回経口投与したときの血漿中濃度は、健康成人男性 (24 例) との比較において、ロラタジンでは Cmax が 1.4～1.7 倍、AUC が 2.8～3.8 倍に上昇し、DCL では Cmax、AUC ともに健康成人と明らかな差は認められなかった。肝機能障害患者におけるロラタジン及び DCL の t_{1/2} はそれぞれ平均 24.1 時間及び 37.1 時間であり、健康成人の 2～3 倍に延長していた¹¹⁾ (外国人データ)。[9.3 参照]

16.6.3 小児

健康小児 (13 例、8～12 歳) にロラタジンシロップ 10mg (非売品) を食後に単回経口投与したときのロラタジン及び DCL の薬物動態パラメータは、以下のとおりであった¹²⁾ (外国人データ)。

	Cmax (ng/mL)	tmax (hr)	AUC (0-t) (ng·hr/mL)	t _{1/2} (hr)
ロラタジン	4.38±3.13	1.00±0.00	8.98±6.21	—
DCL	3.79±0.978	1.69±0.947	51.7±25.3	13.8±3.08

(平均±標準偏差、n=13)

小児及び成人の通年性アレルギー性鼻炎患者を対象とした国内製造販売後臨床薬理試験において、小児患者 (104 例、7～15 歳) 及び成人患者 (104 例、16～64 歳) にそれぞれロラタジン錠 10mg を 1 日 1 回 28 日間反復投与したときのロラタジン及び DCL による全身曝露は、互いに類似していた¹³⁾。

16.6.4 高齢者

高齢者 (12 例、66～78 歳) にロラタジンカプセル 40mg^註 (非売品) を空腹時に単回経口投与したときの血漿中濃度は、非高齢の成人男性 (24 例、21～39 歳) との比較において、ロラタジンでは Cmax が 1.6～1.9 倍、AUC が 1.5～2.0 倍に上昇した。DCL では Cmax が約 1.7 倍であったが、AUC に明らかな差は認められなかった。高齢者でのロラタジン及び DCL の t_{1/2} はそれぞれ平均 18.2 時間及び 17.4 時間であった¹⁴⁾ (外国人データ)。[9.8 参照]

16.7 薬物相互作用

健康成人男性にロラタジン錠 10mg 及びエリスロマイシン (CYP3A4 の阻害剤) 又はシメチジン (CYP3A4 及び CYP2D6 の阻害剤) を空腹時に 10 日間経口投与したときの血漿中ロラタジン及び DCL 濃度の変化率は下表に示すとおりであったが、QTc 間隔を含め心電図への影響は認められなかった^{15),16)}。健康成人男性にロラタジン錠 10mg 及びケトコナゾール (国内では外用剤のみ発売) を空腹時に 10 日間経口投与したとき、血漿中ロラタジン及び DCL 濃度の変化率は下表に示すとおりであった

が、QTc 間隔を含め心電図への影響は認められなかった¹⁶⁾ (外国人データ)。[10.2 参照]

併用薬	n	ロラタジン		DCL	
		Cmax	AUC	Cmax	AUC
エリスロマイシン (500mg 1 日 3 回)	22	+53%	+40%	+61%	+46%
シメチジン (300mg 1 日 4 回)	24	+121%	+103%	+6%	+6%
ケトコナゾール (200mg 1 日 2 回)	24	+223%	+307%	+67%	+73%

16.8 その他

DCL の効力比は未変化体 (ロラタジン) の 7.9 倍であり、ヒトに経口投与したときの主たる薬効に寄与しているのは DCL である¹⁷⁾。

注) 本剤の成人における承認用量は、「通常、ロラタジンとして 1 回 10mg を 1 日 1 回、食後に経口投与する。」である。

17. 臨床成績

17.1 有効性及び安全性に関する試験

(アレルギー性鼻炎)

17.1.1 国内長期投与試験 (成人)

通年性アレルギー性鼻炎に対してロラタジン錠 10mg を 1 日 1 回 9 週間投与したときの最終全般改善率 (中等度改善以上) は 65.3% (32/49) であった。

副作用は 53 例中 8 例 (15.1%) に認められた。副作用は、眠気 6 例 (11.3%)、倦怠感、嘔気及び発疹が各 1 例 (1.9%) であった¹⁸⁾。

17.1.2 国内第Ⅲ相比較試験 (メキタジンを対照とした比較試験) (成人)

通年性アレルギー性鼻炎を対象とした二重盲検比較試験において、ロラタジン錠 10mg (1 日 1 回) あるいはメキタジン 3mg (1 日 2 回) を 1 週間投与したときの最終全般改善率 (中等度改善以上) はそれぞれ 49.4% (39/79) と 45.8% (38/83) であった。

副作用は 100 例中 7 例 (7.0%) に認められた。副作用は、眠気 4 例 (4.0%)、倦怠感 2 例 (2.0%)、胃部不快感、嘔気及び発疹が各 1 例 (1.0%) であった¹⁹⁾。

17.1.3 国内第Ⅲ相比較試験 (プラセボ及びケトチフェンフマル酸塩を対照とした比較試験) (成人)

通年性アレルギー性鼻炎を対象とした二重盲検比較試験において、ロラタジン錠 (10mg/日)、ケトチフェンフマル酸塩 (ケトチフェンとして 2mg/日) あるいはプラセボを 2 週間投与したときの最終全般改善率 (中等度改善以上) はロラタジン群 54.9% (56/102)、ケトチフェンフマル酸塩群 55.1% (59/107)、プラセボ群 39.1% (27/69) であった。また、5 鼻症状スコア^{*1} (くしゃみ発作、鼻汁、鼻閉、鼻内そう痒感、後鼻漏) の投与前値及び投与 2 週後 (又は中止時) の変化量を下表に示した。

投与前	n	投与前 (標準誤差)	変化量 (標準誤差)	比較 ^{*2}
ロラタジン	102	8.23 (0.22)	-2.83 (0.26)	ロラタジン vs ケトチフェン 差の点推定値 0.03 95%CI: -0.62～0.69
ケトチフェン	107	7.41 (0.22)	-2.48 (0.25)	ロラタジン vs プラセボ 差の点推定値 -0.91 95%CI: -1.64～-0.18
プラセボ	69	7.90 (0.25)	-1.77 (0.31)	

※1: 各症状の程度を+++ : 3, ++ : 2, + : 1, - : 0 にスコア化して合計したスコア。

※2: 投与前値を共変量とした共分散分析により、変化量の差 (ロラタジン-ケトチフェン又はロラタジン-プラセボ) とそれぞれの 95% 両側信頼区間 (95%CI) を算出した。

副作用は 103 例中 26 例 (25.2%) に認められた。主な副作用は、眠気 14 例 (13.6%)、口渇感 3 例 (2.9%)、咽頭痛、鼻の乾燥感及び倦怠感が各 2 例 (1.9%) 等であった²⁰⁾。

17.1.4 国内第Ⅲ相比較試験 (ケトチフェンフマル酸塩を対照とした比較試験) (小児)

通年性アレルギー性鼻炎を対象とした二重盲検比較試験において、ロラタジンシロップ (3～6 歳: ロラタジンとして 5mg/日、7～15 歳: ロラタジンとして 10mg/日、非売品) あるいはケトチフェンフマル酸塩 (3～6 歳: ケトチフェンとして 1.2mg/日、7～15 歳: ケトチフェンとして 2mg/日) を 2 週間投与した。4 鼻症状スコア^{*1} (くしゃみ発作、鼻汁、鼻閉、鼻内そう痒感) の投与前値及び投与 2 週後 (又は中止時) の変化量を下表に示した。

投与前	n	投与前 (標準誤差)	変化量 (標準誤差)	比較 ^{*2}
ロラタジン	96	7.08 (0.19)	-2.53 (0.25)	差の点推定値 -0.39 95%CI: -1.04～0.25
ケトチフェン	91	6.36 (0.22)	-1.74 (0.26)	

※1: 各症状の程度を+++ : 3, ++ : 2, + : 1, - : 0 にスコア化して合計したスコア。

※2: 投与前値及び年齢層を共変量とした共分散分析により、変化量の差 (ロラタジン-ケトチフェン) とその 95% 両側信頼区間 (95%CI) を算出した。

副作用は 96 例中 12 例 (12.5%) に認められた。主な副作用は、傾眠 6 例 (6.3%)、腹痛 2 例 (2.1%) 等であった²¹⁾。

〔尋麻疹、皮膚疾患（湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症）に伴うそう痒〕

17.1.5 国内長期投与試験（成人）

慢性じん麻疹に対してロラタジン錠 10mg を 1 日 1 回 8 週間投与したときの最終治療効果（有効以上）は 87.4%（76/87）であった。副作用は 92 例中 10 例（10.9%）に認められた。副作用は、眠気 6 例（6.5%）、倦怠感 3 例（3.3%）、心高部不快感、腹部膨満感、下痢及び生理遅延が各 1 例（1.1%）であった²²⁾。

17.1.6 国内第Ⅲ相比較試験（メキタジンを対照とした比較試験）（成人）

慢性じん麻疹を対象とした二重盲検比較試験において、ロラタジン錠 10mg（1 日 1 回）あるいはメキタジン 3mg（1 日 2 回）を 7 日間投与したときの最終全般改善率（中等度改善以上）はそれぞれ 71.3%（82/115）と 66.7%（78/117）であった。副作用は 119 例中 12 例（10.1%）に認められた。副作用は、眠気 8 例（6.7%）、口渇 2 例（1.7%）、倦怠感、食欲亢進、腹部不快感及び舌のびらん・疼痛が各 1 例（0.8%）であった²³⁾。

17.1.7 国内第Ⅲ相比較試験（シュードプラセボ及びケトチフェンフマル酸塩を対照とした比較試験）（成人）

慢性じん麻疹を対象とした二重盲検比較試験において、ロラタジン錠（10mg/日）、ケトチフェンフマル酸塩（ケトチフェンとして 2mg/日）あるいはシュードプラセボ（ロラタジンとして 1mg/日）を 2 週間投与したところ、投与 2 週後（又は中止時）の全般改善率（中等度改善以上）は、それぞれ 80.5%、62.1%、43.8%であった（ロラタジンとケトチフェンの改善率の差の点推定値 18.4%、95%両側信頼区間 7.4%~29.3%）。また、皮膚症状スコア^{*1}の投与前値及び投与 2 週後（又は中止時）の変化量を下表に示した。

そう痒スコア

投与群	n	投与前 (標準誤差)	変化量 (標準誤差)	比較 ^{*2}
ロラタジン	128	1.98 (0.06)	-1.48 (0.07)	ロラタジン vs ケトチフェン 差の点推定値 -0.27 95%CI: -0.48~-0.07
ケトチフェン	124	1.97 (0.06)	-1.20 (0.09)	ロラタジン vs シュードプラセボ 差の点推定値 -0.77 95%CI: -1.00~-0.53
シュードプラセボ	80	2.08 (0.07)	-0.78 (0.13)	

発斑スコア

投与群	n	投与前 (標準誤差)	変化量 (標準誤差)	比較 ^{*2}
ロラタジン	128	1.95 (0.06)	-1.41 (0.08)	ロラタジン vs ケトチフェン 差の点推定値 -0.23 95%CI: -0.43~-0.04
ケトチフェン	124	1.87 (0.06)	-1.11 (0.09)	ロラタジン vs シュードプラセボ 差の点推定値 -0.55 95%CI: -0.77~-0.33
シュードプラセボ	80	1.91 (0.07)	-0.82 (0.11)	

*1: そう痒、発斑の程度をそれぞれ+++、++、+、±、0.5、-、0 にスコア化した。
*2: 投与前値及び投与前値×投与前群を共変量とした共分散分析により、変化量の差（ロラタジン-ケトチフェン又はロラタジン-シュードプラセボ）とそれぞれの 95%両側信頼区間（95%CI）を算出した。

副作用は 128 例中 27 例（21.1%）に認められた。主な副作用は、眠気 17 例（13.3%）、めまい・立ちくらみ・ふらつき感、口渇感及び胃痛が各 2 例（1.6%）等であった²⁴⁾。

17.1.8 国内一般臨床試験（成人）

湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症に対してロラタジン錠 10mg を 1 日 1 回 7 日間投与したときの最終治療効果（有効以上）は 61.0%（161/264）であった。

副作用は 284 例中 22 例（7.7%）に認められた。副作用は、眠気 15 例（5.3%）、倦怠感 4 例（1.4%）、口渇 3 例（1.1%）、頭痛、肩こり、胃部不快感及び食欲不振が各 1 例（1.1%）であった²⁵⁾。

17.1.9 国内第Ⅲ相比較試験（ケトチフェンフマル酸塩を対照とした比較試験）（小児）

代表的なそう痒性皮膚疾患であるアトピー性皮膚炎を対象とした二重盲検比較試験において、ロラタジンドライシロップ（3~6 歳：ロラタジンとして 5mg/日、7~15 歳：ロラタジンとして 10mg/日）あるいはケトチフェンフマル酸塩（3~6 歳：ケトチフェンとして 1.2mg/日、7~15 歳：ケトチフェンとして 2mg/日）を 2 週間投与した。主要そう痒スコア^{*1}の投与前値及び投与 2 週後（又は中止時）の変化量を下表に示した。

投与群	n	投与前 (標準誤差)	変化量 (標準誤差)	比較 ^{*2}
ロラタジン	101	2.50 (0.06)	-0.51 (0.08)	差の点推定値 0.03 95%CI: -0.18~-0.25
ケトチフェン	100	2.56 (0.06)	-0.58 (0.08)	

*1: そう痒の程度を++++、+++、++、+、±、-、0 にスコア化し、日中又は夜間の高い方を主要そう痒スコアとした。
*2: 投与前値及び年齢層を共変量とした共分散分析により、変化量の差（ロラタジン-ケトチフェン）とその 95%両側信頼区間（95%CI）を算出した。

副作用は 101 例中 4 例（4.0%）に認められた。副作用は、ALT 増加及び AST 増加が各 2 例（2.0%）、γ-GTP 増加、肝機能検査値異常及び傾眠が各 1 例（1.0%）であった²⁶⁾。

17.3 その他

17.3.1 眠気及び運転・機械操作能力に対する影響

ロラタジン服用後の諸動作はプラセボ服用時と類似し、ロラタジンの運転・機械操作能力に対する影響は認められなかった。

- (1) 健康成人男女（20 例）を対象にパソコンでの数字入力作業による精神運動機能に及ぼす影響を検討したとき、ロラタジン 10mg 及び 20mg^(b) 投与時の正入力数はプラセボ投与時と有意差がなく、精神運動機能に影響を与えなかった²⁷⁾。
- (2) 通年性アレルギー性鼻炎に対する二重盲検比較試験の結果、ロラタジン 10mg（103 例）の眠気の発現頻度は、プラセボ（70 例）と同程度であった²⁰⁾。
- (3) 健康成人男女（16 例）を対象に入眠までの時間を比較したとき、ロラタジン 10mg 投与時の平均入眠時間はプラセボ投与時と有意差がなかった²⁸⁾（外国人データ）。
- (4) 健康成人男性（20 例）を対象にサーキット上での自動車運転能力に及ぼす影響を検討したとき、ロラタジン 10mg 及び 20mg^(b) 投与時の運転能力はプラセボ投与時と有意差がなく、運転能力に影響を与えなかった²⁹⁾（外国人データ）。
- (5) 空軍パイロット及び民間航空会社パイロット（40 例）を対象にフライトシミュレーション試験を実施した結果、ロラタジン 10mg は、プラセボと比較してパイロットの航空機操作能力に影響を与えなかった³⁰⁾（外国人データ）。

17.3.2 心血管系に及ぼす影響

健康成人男性（50 例）にロラタジン 40mg^(b) を 1 日 1 回 13 週間投与したとき、プラセボ（20 例）と比較して QTc 間隔を含む心電図及び心拍数への影響は認められなかった³¹⁾（外国人データ）。

注) 本剤の成人における承認用量は、「通常、ロラタジンとして 1 回 10mg を 1 日 1 回、食後に経口投与する。」である。

18. 薬効薬理

18.1 作用機序

ロラタジン及び DCL は、ヒスタミン H₁ 受容体拮抗作用を示す。また、ヒスタミン、ロイコトリエン C₄ の遊離抑制作用を示す³²⁾。

18.2 ヒスタミン H₁ 受容体拮抗作用

ロラタジン及び DCL は、モルモットの肺 H₁ 受容体においてヒスタミンと拮抗し³²⁾、モルモット摘出回腸のヒスタミン誘発収縮を抑制した³³⁾ (*in vitro*)。DCL のヒト H₁ 受容体拮抗作用はロラタジンよりも強かった³⁴⁾。また、ロラタジンは、ラットのヒスタミン誘発皮膚血管透過性亢進³⁵⁾、マウスのヒスタミン誘発足趾浮腫及びモルモットのヒスタミン誘発致死³⁶⁾ を抑制した (*in vivo*)。

18.3 ヒスタミン及びロイコトリエン C₄ 遊離抑制作用

ロラタジン又は DCL は、ラット腹腔肥満細胞又はマウス肥満細胞株 MC-9 細胞からのヒスタミン又はロイコトリエン C₄ 遊離を抑制し³⁷⁾、³⁸⁾ (*in vitro*)、能動感作モルモットに経口投与したときの摘出肺切片からの抗原誘発ヒスタミン遊離を抑制した³⁸⁾ (*ex vivo*)。

18.4 抗原誘発反応に対する作用

ロラタジンは、ラット及びモルモットの受身皮膚アナフィラキシー反応 (PCA 反応) 並びに能動感作ラット及びモルモットの抗原誘発鼻腔内色素漏出反応を抑制した³⁹⁾、⁴⁰⁾。

18.5 作用の持続性

ラットのヒスタミン誘発皮膚血管透過性亢進に対するロラタジンの抑制作用は、経口投与後 12 時間においても認められた³⁵⁾ (*in vivo*)。ヒトにおいて錠 10mg 単回投与後 14 時間以上でもヒスタミン誘発皮内反応（膨疹及び紅斑）を抑制した⁴¹⁾。

19. 有効成分に関する理化学的知見

一般名：ロラタジン (Loratadine)

化学名：Ethyl 4-(8-chloro-5,6-dihydro-11H-

benzo[5,6]cyclohepta[1,2-b]pyridin-11-ylidene)-1-piperidinecarboxylate

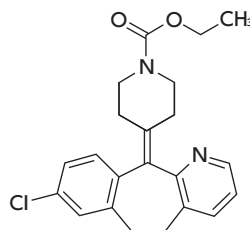
分子式：C₂₂H₂₃ClN₂O₂

分子量：382.88

性状：白色の結晶性の粉末である。

酢酸（100）に極めて溶けやすく、メタノール又はエタノール（99.5）に溶けやすく、アセトニトリルにやや溶けやすく、水にほとんど溶けない。

構造式：



融点：133~137°C

20. 取扱い上の注意

アルミピロー包装開封後は、湿気を避けて保存すること。

22. 包装

100 錠 [10 錠 (PTP) × 10]

23. 主要文献

- 1) 第1相臨床試験(単回投与)(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要へ.4.2.1)
- 2) 第1相臨床試験(反復投与)(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要へ.4.2.2)
- 3) 社内資料:生物学的同等性試験
- 4) 食事の影響(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要へ.4.3)
- 5) 血漿タンパク結合(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要へ.3.2.4)
- 6) ラットの組織中濃度(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要へ.3.2.1)
- 7) ヒトにおける薬物動態試験(代謝、排泄)(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要へ.3.3.1、へ.4.1)
- 8) Yumibe, N. et al.: Biochem. Pharmacol. 1996; 51: 165-172
- 9) Hilbert, J. et al.: J. Clin. Pharmacol. 1988; 28: 234-239
- 10) 腎機能障害患者における薬物動態(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要へ.4.6)
- 11) 肝機能障害患者における薬物動態(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要へ.4.5)
- 12) 小児における薬物動態(クラリチン錠/レディタブ錠/ドライシロップ:2007年10月19日承認、申請資料概要2.7.6.4.1.5)
- 13) 小児及び成人患者における国内製造販売後臨床薬理試験(クラリチン錠/レディタブ錠/ドライシロップ:2015年9月17日再審査報告書)
- 14) 高齢者における薬物動態(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要へ.4.4)
- 15) Brannan, M.D. et al.: Clin. Pharmacol. Ther. 1995; 58: 269-278
- 16) Kosoglou, T. et al.: Br. J. Clin. Pharmacol. 2000; 50: 581-589
- 17) 代謝物の薬理作用(クラリチン錠:2002年7月5日承認、審査報告書)
- 18) 奥田稔 他:耳展1992; 35(補1): 13-26
- 19) 奥田稔 他:耳展1992; 35(補4): 327-345
- 20) プラセボ及びケトチフェンフマル酸塩を対照とした比較試験(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要ト.1.1.3.3)
- 21) 石川哮 他:臨床医薬2007; 23: 965-990
- 22) 久木田淳 他:臨床医薬1990; 6: 2457-2468
- 23) 久木田淳 他:臨床医薬1990; 6: 2689-2705
- 24) シュードプラセボ及びケトチフェンフマル酸塩を対照とした比較試験(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要ト.1.1.2.3)
- 25) 久木田淳 他:臨床医薬1990; 6: 2443-2456
- 26) 川島眞 他:臨床医薬2007; 23: 991-1016
- 27) Nakano, S. et al.: 臨床薬理2007; 38: 401-407
- 28) Roth, T. et al.: J. Allergy Clin. Immunol. 1987; 80: 94-98
- 29) Riedel, W.J. et al.: Management of Allergy in the 1990's. 1990; 38-49
- 30) Neves-Pinto, R.M. et al.: American J. Rhinology. 1992; 6: 23-27
- 31) 心電図に及ぼす影響の検討(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要ト.1.2.4)
- 32) モルモットのH₁受容体親和性(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要ホ.1.4.1)
- 33) モルモットのヒスタミン誘発収縮に対する作用(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要ホ.1.4.1)
- 34) Anthes, J.C. et al.: Eur. J. Pharmacol. 2002; 449: 229-237
- 35) ラットのヒスタミン誘発皮膚血管透過性亢進に対する作用(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要ホ.1.2.1)
- 36) Barnett, A. et al.: Agents Actions. 1984; 14: 590-597
- 37) Kreutner, W. et al.: Allergy. 1987; 42: 57-63
- 38) 亀井千晃 他:薬理と治療1996; 24: 49-52
- 39) アレルギー性皮膚炎モデルにおける作用(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要ホ.1.1.1)
- 40) アレルギー性鼻炎モデルにおける作用(クラリチン錠:2002年7月5日承認、申請資料概要ホ.1.1.2)
- 41) 中島光好 他:臨床医薬1990; 6: 1537-1549

* 24. 文献請求先及び問い合わせ先

日本ジェネリック株式会社 お客様相談室
〒108-0014 東京都港区芝五丁目33番11号
TEL 0120-893-170 FAX 0120-893-172

26. 製造販売業者等

* 26.1 製造販売元

 **日本ジェネリック株式会社**
東京都港区芝五丁目33番11号